

平泉 澄氏インタビュー (二)

○先生は国史を卒業なさってから大学院に進まれますね。今みたい
に指導教官がいて、学生がいて、指導教官というのはどういう指
導をしていたのか。戦前の大学院というのは教室の中でどうい
ふような研究を……。

平泉 何もないんです。

○スクーリングは全然ないわけですか。

平泉 何もない、一切ないんです。

○何か特別に、例えば黒板先生について。

平泉 そういう特別な制度はありません。指導教官ということは
あり、お世話を願わなくてはならんはずですが、何ら今のようの特
別な講義があるわけでもなければ……。今は修士課程の講義がある
でしょう。

○ございます。

平泉 それが全然ないんです。ただ自由に学問をする。だから大
学院の学生というのは非常に少なかったんです。

○それは年限を決めて、ある特定のテーマで研究するということで

すか。

平泉 そういうことでしょう。それはそんなに行くものはなかつ
たんです。私のときには私だけでしょうね。何もそれに規定がない
んです。

私が卒業したときは今と非常に違うんだ。私はそのときに就職で、
来いと招かれたところが五、六か所あった。みんなそうそうたると
ころですよ。文部省、宮内省、それから高等学校、いろいろな編纂
所、研究所など五、六か所から招かれた。どうしようかなと思っ
てね。家は貧乏だし。この家は昨日見られたが、ちょっと今はこれだ
けの神社はないですよ。やせても枯れても境内四万五千坪、山を入
れたら七十万坪。そんなところはどこにもない。しかし同時に窮迫
の極なんです。いまでも山が六、七十万坪あっても収入はひとつも
ないです。税金をまかなうのがようやくですね。このほうは全然経
済的な考えの外にある。別に私は目的があってそれは考えている。
境内四万五千坪は無税地ですわ。何の収益もないことは当然なん
です。それでいてお養銭はない。今は多いんですが、前にはだれも人
はこなかった。政府の待遇は郷社ですよ。府県社の下に郷社、その
下が村社。郷というのは郡ですから、郡の崇敬を集めているという
待遇なんです。

ここは山が十里四方というでしょう。盛んなときの田畑九万石は
除くとしても、十里四方の山というのは明治四年まで持っていたん
です。ところが難儀なことには氏子が三人しかいない。徳川將軍家と
松平越前守(越前国守)、勝山の殿様の小笠原家。ほかにはないん

ですよ。ところが明治四年に全部なくなるでしょう。山は取られたんです。この場所が白山からずっとこちらの山は十里四方ある。これは取られた。その二つをつなぐ道幅二十間幅のこれが取られた。

この場所の現地だけで十何千坪は没収して国有にした。お宮は何もなくなつて骨がらみだけこう残つた。それが家の姿です。(テープ反転)

就職の口があつたでしょう。それで黒板先生に相談したんです。先生、どうしたものでしょう。ここへ来い、ここへ来いといわれるところがこれだけあるんですがと相談しましたら、全部断われ。ああ、そうですか、全部断わるんですか。断わりなさい。

これは、私が今日あるのは黒板先生のおかげです。実に何ともいえない私の感銘です。私の一生はこれで決まりました。つまり、人間がだめになるのは、卒業してすぐ月給をもらつて、この月給から離れたら自分は大変だと思ふのでしがみつく。みんなの根性はこれなんだ、少しでも月給が上がればよい、それだけを考へている。これで人間がだめになる。ほかの人は就職するがよい。わしは就職の世話をしようと思つた。平泉、おまえだけ就職するな。おまえはもっと大きなことを考へているだろう。日本の国のために尽くそうと考へているだろう。それなら就職するな。人間は貧乏で死ぬといふことはない。飢え死にはしない。本人が価値のないものなら飢え死にをするだろう。本人に価値があれば飢え死にはしないはずだ。それを身をもつて体験せよ、おれは飢え死にしないんだといふことがわかつたら、おまえは天下を相手にたたかえる。そこで初めてお

まえはものになるんだ。えらい教訓ですね。

わかりました、そこで全部断りました。そして、私のところへ頼みにこられると、友だちをみんな推薦するんです。人のことを言つては悪いが、同級生や友だち、先輩をお世話して、話ぐればこの人はいいですよ、と推して、私自身は大学院学生でした。貧乏をせよという先生の教えですから、そのときにどれくらいの収入があつたかね。史学会の委員でどれくらいの手当があつたのかはつきり覚えていないが、十円ですかいの。今幾らもらつてゐるか知らんが、十円だったかと思うんですよ。同級生はみんなほうぼうへ勤めて、最下級で七十円。それを私は十円ほどのお手当をもらつて史学雑誌の編集をやりながら研究をしておつた。

しかし、黒板先生も親切なお方で、その自分は卒業式は七月ですから、おい、平泉と秋になつてお呼びになつて、日光の東照宮の歴史を書くことになつたんだがおまえやれ。かしこまりましたといふことで、十一月になつて日光へ行つた。宮司のほうから話があつて、お願いしたいという。黒板先生は心配されて、平泉一人では大変だから助手をだれか付けようとおつしやつた。ところが難儀なことに助手になり手はあつても、私より年が上だと具合が悪い。当時私は数えて二十四ですが、二十四以下で助手に使える者はないんだ。幸いなことに広野三郎という、史料編纂所にずつとおつたアララギ派の歌よみですが、号を牛麿、これがその年に国学院大学を出て、私より一つ下なんです、これならよからうといふので、一つ下といふ理由で広野を採つて、二人で関係することになつた。

東照宮へ行ったところ、宮司の案が主任は平泉、助手は広野。私に三十五円、広野に二十五円という案だったので。それで、私は、宮司さん、すまんが私にひとつ希望があります。何なりとおっしゃってください。広野と私と月給を代えて下さい。私が二十五円、広野は三十五円。こうしたんです。宮司はびっくりして、いいんですかという。いいんです。このほうが希望なんです。そのかわり私は時間的に何らの拘束を受けません。広野は気の毒だけれども、これはこの仕事をずっと続けて毎日やってもらおう。こういう約束で二十五円で、一年間かかって有名な『誤られたる日光廟』を発表したんです。

これは皆さんも知っておられるだろうけれども、それまで日光の自慢の一つは、日光の今の壮大な建築は寛永元年に工事を始めて、寛永十三年に出来上がった。つまり、十三年の歳月を費やした。その費用は全国の三百諸侯から取り上げて、金は使いほうだいということであった。全国の力を費し、資材は全国から集めたというようなことで得意だった。

それを私は全部うそだと言ったわけです。まず、仕事を始めたのは寛永元年でなく、寛永十一年。出来上がったのは寛永十三年で、年月を清算すると一年半でやったということを発表したんです。

これは先年、文芸春秋の社長で、西洋史を出た池島信平氏と、国史学会会長の高柳光寿との対談がテレビに出たんです。日光東照宮史の全体の構想は、本編は私が主任、建築編は大江新太郎と言って東大工学部の講師です。宝物編は日光東照宮宝物館における古屋さん、

この三本立てだったんです。私のところにだけ広野が助手で付いておった。ところが仕事がなかなか大変だから、もう一人頼もうというので高柳光寿を呼んできて、広野と並んで私を助けてもらうことになって、高柳も関係しておったんです。その高柳と池島信平との対談がテレビに出た。

ところが高柳光寿が、日光の研究は面白い。あれは自分らがやったんだが、もとは十三年かかったというけれども、実は一年半だ。全国の大名から金を徴発したというのがそれほうそで、全部家光一人から出たんだ。その金は五十六万八千両、米千石だと言ったんです。そうしたら池島は憤然として、それは平泉博士の研究じゃないかと言ったら、高柳が非常にあわてて、いや、平泉氏もやったがどうかモゾモゾ言った。いや、これは明確に平泉博士の研究なんだ。そんなことははっきりわかっているじゃないかと、えらく手厳しくやっつけた。池島という人は男ですね。よくあれだけやったと思う。高柳はこの研究には何ら無関係です。それをよくああいうことがやれると思うんですが、そういうことがありました。私はテレビを見たわけではないんですが、うちの次男とか、その対談を見ていた人から知らせてもらいました。

それを私は二十五円でやっていたんだが、黒板先生は偉いと思いますね。そういうときに私がどれほど苦しんでいるか、先生はよくわかっておられるから、日光へお伴して行くでしょう。私と広野は三等、黒板先生は二等で行く。日光は外人がくるから必ず一等車があります。一等では建築の大江新太郎先生がこられる。講師で黒

板先生の前に出れば、「聴取不能」なんだけれども、金が入ってくる人だから一等で行かれる。汽車は一等、二等、三等とみんな違うんです。それで行って東照宮でいろいろ打ち合わせをする。そうすると、こんな鉢に日光まんじゅうが山盛り出る。これはうまいなと先生も一生懸命あがって、平泉食べる、はいて食べてる。すると先生は急いで食べられて、もうなくなつたか、宮司、もう一ぱいとやられるんです。そうすると宮司がもう一ぱい積むでしょう。先生はそれに絶対手を付けられないで、話が終わる時分に、おい、平泉これを持って行け、余ったわいと、きれいに一鉢、山盛り下さる。それは何とも言えぬ親分ですね。こんな先生は前後にないです。非常に厳しいが同時に最もあたたかい先生でした。うれしいものですね。

そういうことで研究しておって、その間にいろいろな論文ができました。いまの五十六万八千両も決算報告を基準にして話をしているんだから、だれも反論できない。坪井先生はしかられましたね。その研究ができたときに坪井先生はわしに、きみだめですよ、建築のことも知らんものが、建築のことを偉そうに言つたつてだめですよといわれた。これは答弁のしようもないから黙っていました、建築のほうでどういう反対が出るかという、その時分に東大工学部の建築学教室を挙げて作つたのが、東大紀要・日光廟建築論というこんな本で、ぜいたくな本ですよ。それに十三年かかって全国の大名から金を徴発し、全国の大工を徴用してこうだという壮大な計画が出てゐる。それを全部私が破つたでしょう。

そうしたところが建築のほうから異論が出た。ほかのことはわれわれはわからん。歴史上そうなるならしかたがないけれども、建築のほうからいうと一年半ではできないんだ。どこができないかというところだ。漆というものは塗っては乾かし、乾くのを待ってまた塗る、また乾く。これで非常に時間がかかるもので、一年半ではどうして不可能だということだった。そこで私はその説明にかかった。漆塗りは塗師屋といって日光に多いんです。いま日本中の塗師屋を集めても日光には及ばないくらい、日光には塗師屋がいちばん多い。あの日光廟のためにそれだけ人が集まつている。その塗師屋へ行つていろいろ話を聞いたら、われわれの先祖は寛永の造替のときには非常に楽しかった。これほど楽しかったことはない。酒が飲めたという。大変な酒が集まつたのでそれが飲めた。これが私を助けたんです。これはおもしろい。漆の中へ酒を入れると塗つたあとの乾きが早いから、どんどん仕事はかどる。同時にその酒の半分はおなかに入つたから、これが楽しい彼らの思い出なんです。子々孫々に至るまで彼らの楽しい思い出ですから、よほど飲んだんですね。これで建築屋の私に対する非難が一つなくなつたんです。

それからもう一つと、そうなると仕方がないが、そんなに早くできるものかなということをお聞きなすよ。それで、建築でいけば、ちばん難しいものは何かということをお聞きしたら建築家のほうから、それは城郭の天守閣だということです。これは極めて狭い場所に、極めて高いものを建てなければならぬ。しかも戦争だから堅牢無比のものでなければならぬ。これがどのくらいの年月でできたかが

ひとつのめどになるというんです。よろしいということで私は名古屋城のことを調べました。日本中の城でいちばん天守閣が立派なのは名古屋です。戦災でだめになったでしょうが加藤清正です。ここで清正が天守閣を造ったときを調べたところが、清正が行って天守閣の最初の礎石を置いたのが正月で、それから建てて金の鯨ほこをのせて肥後へ帰るのが八月、つまり半年の仕事なんです。それはそうなくてはならない。いつ戦争が起こるかしれないのに、三年計画、五年計画でやっているばかどこにある。一晚のうちにでも建てたいくらいで、半年かかったのは長いほうだということで私は話をしました。

つまり、今の建築家には日光の建築は十三年かかることが当然である。非常な金を使い、非常な時間を要するというのが、今の建築家の常識なんです。つまり、今の建築家の墮落と、ポリーナスをもらいたい、くればあればストをやるといような根性で何かできるかという議論になってきたんです。それで私はこれも勝った。もうこれも文句の言いようがない。

ところがそういうことが分かったあとで、工学博士の大熊某という建築家が、日光は極めて短時日の間にできたのだということを出して、私の論を全部無視して得意になって建築学会で発表したんですよ。しかし、建築学会の幹事がおもしろい男で、さっきの池島信平と同じですわ。男気を出して私に知らせてきて、大熊が日光廟の発表をからおいでなさいというので、知らん顔して行ったんです。大熊は得意になって新発見というのでやった。講演が済ん

だあとで私は大熊さんのところへ行って、大熊さん、平泉ですと名刺を出したんです。大熊氏は驚いて、あやうく壇から転がり落ちるような、非常な動揺でしたね。そんな研究が大学院のときの研究です。大学院としては何らほかの講義も指導も受けてはおらんし、特典はない。ただ、黒板先生が適当に私を指導して、月給を取るなどいわれた。これが私の大学院学生の指導方針です。

五十六万八千両という金を家光が使ったが、その金がどこから出たかまで調べたんです。それは家康のへそくりで久能山のお蔵から出たということまで全部解明したんです。苦労したんですがね。そういう研究がいくつかあって、それが認められて、大正十二年に講師になったが、まだ大学院の学生です。

あなたの方の時分の事務局長はだれですか。

○ぼくは知りません。

平泉 清島書記。

○清島重徳。

平泉 それです、それです。その人に私は入学願書を差し出し、大学院学生の願書もその人に受け取ってもらい、その人が私のところへきて、学生のまま講師というのは具合が悪いから、大学院へ退学届を出してくださいというので出して、それで講師になって、私が昭和二十年に大学を辞職するときもその人ですよ。私の出入りは全部清島氏が処置してくれた。思い出の人ですが死んだようですよ。○履歴書では、講師は大学院の学生でありながら囑託を受けているということになっています。

平泉 具合が悪いからやめてくれと言ってきましたよ。

○三か月ばかりあります。

平泉 私は手続なんかは考えにないですから、清島さんが見るに見かねて、やめなさいと言いにきたんですよ。

○履歴書ですと満期と書いてありますが。

平泉 そうですか。

○五年間です。

平泉 それじゃそうなんですかね。

○大正十年に宗教制度調査囑託というのがあります。

平泉 みんなそれは黒板先生関係です。先生は適当に私に多少の収入はあるよう、私をいつも死なん程度に見届けてやるということ、これは大したことはないんですがね。

○このときはどういうことをおやりになったのですか。

平泉 宗教制度調査というのは、仏教を政府がどういうふうに統括しておったかの問題です。諸宗法度なんかがあるでしょう。ああいうものの研究なんです。幕府が天台宗とか真宗をどういうふうに統括しておったか。例えば鹿兒島藩は真宗を許さななんです。許されるのは明治四年からです。そういうことを調べたんです。そして私はあとに市村〔其三郎〕を推薦してやめて、市村のあとが豊田武。○三月に講師囑託になって、七月に満期だから。履歴上は退学というのを書かないで五年間いけば満期というふうに手続きの上で書かせていますね。

○大学院というのは授業料は必要だったのですか。

平泉 必要でしょ。

○そのお金も要るわけですね。

平泉 少し要るんですが大したことはありません。とにかく東京大学ほど金に無関心なところはないですね。終戦後はだんだん変わったでしょうがね。それは実におどろいたところで、私は大学院学生のときに沓岐・対馬に調べに行きたいと言ったら、三上先生が、それは行っていい、大学院の出張にしてやろうと話してください、出張してもらったんですよ。そして沓岐、対馬を調べに行って成績をあげてきた。それに大学院学生の研究補助を大学院からくださるといので旅費が出たんです。幾ら出たと思いますか。八円ですよ、八円。

○八円ですか。

平泉 八円という金はおよそ考えられない金なんです。何ともいえないものですね。そうしたら三上先生もさすがに気の毒がられてね。私はそのとき、対馬探訪の報告をだしたでしょう。それを史料編纂所で史料として買い上げようということで、幾らか補助してくださいだったんです。その時分に私は史学会の編集委員を辞めたので、退任の席で、自分の微力のためにお役に立てませんと挨拶をしたところ、評議委員長の坪井先生は私の挨拶が済んだら、要らんことをいくなといわれたんです。私は腹を立ててね。さんざん骨を折ってきたけれども、お役にも立ちませんと挨拶するのは儀礼だ。その儀礼にみんなの前で要らんことをいうなどは、いくらなんでもひどい。これはけんかしようという気になって先生の家へ行ったん

です。そうしたら上がれといわれて、座敷へ上がって待っていた。私の座ぶとんがここにあったから、それにすわっていた。そこに離れて先生の座ぶとんがあって、先生はまだ出てこれられない。間が大分あいておる。やがて先生が出てこられた。これが癩性病みの先生で、わしはだらしがないのでこうなっておるが、先生はこうなってきたらたばこ盆を下げて、こうして出てこられて、わしは膝をちゃんとなおしておったところ、先生はそこへすわられるかと思ったらすわらない。ふとんの間へどつかとすわって、きみはえらいことをしてきましたね。みごとでしたといわれたんです。対馬採訪で非常に驚いたほどの研究があった。こっちは文句をいおうと思っで行ったところが、そういわれたらこっちも参って、先生と仲直りしました。

先生のほめられたわけは、対馬の宗氏は平宗盛の子孫だということに、宗家の伝えはなっているし、系図も平家の末裔である。ところが私が対馬で見つけた応仁年間の鏡の銘に惟宗何々とあり、惟宗の宗をとって宗氏と言ったので平家ではないんです。惟宗と平家とは相對する氏でしょう。惟宗氏なんです。それを先生は喜ばれまして、えらいことを見つけてきてくれた、そうだろうと思っておったが、きみは証拠をつかんできたなと非常に喜ばれた。そんなことがありました。

それから大正七年の変化は行幸がなくなったこと。成績順ということがなくなったこと。それは一種のデモクラシーの思想というところへつながってきたのですね。

○九年に大学で新聞を出し始めるんですが、それはどんな体裁のもだったかご記憶はありますか。

平泉 それは残っていませんか。

○十二年の十月ぐらいまで、全然残っていないんです。五十七号ぐらいまで。大学の新聞社にもないし。

平泉 いいものでしたよ。小さいものでしたが、内容もそんなにいやなことはなかった。

○3年分くらいないんです。震災前と震災直後は全くありません。

平泉 それは私も記憶が明確でないですね。その間の出来事の一つは震災ですね。大正七年にちよつとガグツときた。そして今度は十二年に震災が起こって、これは私どもにとって非常に残念なことは図書館を焼いたこと。これは何ともいえない大きな損害ですね。図書館の本の数は百万くらいで、大した数ではないけれども、それは今の図書館とは違う、精選したものなんです。あとは寄付であれ、何であれ集めたでしょう。これはいうと悪いが玉石混淆というか、数が多かったところが必ずしもよいというわけではない。もとのみんな苦労して集めた本で質がよいでしょう。それからこれは何ともいえない大きな損失だと思うのは、ふつうの書庫の本と別個に屋根裏のようなところに放り込んであった本が非常に貴重なんです。それは幕府の史料で今の最高裁判所にあたる評定所（寺社・勅定・町奉行）の記録というのが大きな本で、一冊の厚さが大体これでもまだ足らん。これよりもっと大きい。そして大きさはこのこうとったものです。それはその何ともいえない紙ですよ。さっきお見え

しようと言った大高禮紙のような立派な、パンパンした紙で、それが何百冊とあるんです。それは幕府が瓦解したので内閣が引き継いで、内閣が大学へ引き継いだものが、全部天井裏に上げてあったんです。ふつうの人は見ないんですが、それを私は講師にしてもらったおかげで、自由に中が歩ける。それを見て写し始めたが、全部写しきれないから主要なところをね。これを見た人は中田薫先生と私だけだろうと思うんです。文部省の宗教制度の関係もあって、写してはそれを文部省へも持っていったんですが、両方とも焼けてしまいました。それは記憶にはあるけれども歴史的な史料としては記憶は役に立たない。とても役に立つようなものではないですよ。幕府の政治のとり方というのは、すべて先例に従うんですから、ずっと先例を調べてこれをこう処断するというようなことがあるでしょう。非常にそれはわれわれのほうでも楽しいし、事情がよくわかるんです。惜しいことでしたね。

その時分に、図書館はやつとのことを入れたと思っただけでなくなつて、バラックがやがて建つてそこで講義を始めた。震災が十二年九月一日で、最初に大学で学会が開かれたのが、たぶん十月の末か十一月です。どこかそれはわかっていたはずだが、文学部の事務室が……。今どうなっていますか。テニスコートありますか。

○(アルバムを見ながら)これが旧本館。

平泉 これはイギリス風の品格のある、いい建物でした。正門がありまして正面が大講堂ですが、そのうしろにグラウンドがあって、向こうは医学部で、ここに通りがあって鉄門へ行きます。こっちが

ちょっとこうなって弥生門へ行きます。この角に文学部の事務室がバラックであつたんです。その二階で初めて日本学会の講演があつて、井上哲次郎先生が主催しておられた。私は招かれてそこへ行つて講演をしましたよ。私が前席で、あとは金田一(京助)さんのアイヌの話でしたが、焼け跡で初めての学術的な講演会というのは、これだつたんですよ。それがあつた翌週から講義をバラックで始めたんです。

そのときも女子学生がいましたね。待ってください。はっきりしないな。女学生はまだか。女学生は何年です。

○大正八年から選科とか研究生で入っています。

平泉 話が前後して悪いんですが、重大な問題として私が解明したく思いながら、しない問題は、アメリカ人留学生がたくさん入ってくるんです。これは非常に重大で、日本はぼんやりしているんですが、全部スパイだということがあとから明瞭になりました。これを許すか許さんか、教授会で決定されるんです。みんな得意になつて、日本の学問の水準が高くなったので、アメリカ人がくるのだと思つて喜んでるんですが、全部スパイですよ。これが非常な数になつたんです。それがどこから入つてきて、いつ帰つたのか、帰るときに挨拶していったので私は覚えてはいるんですがね。帰つて間もなく開戦ですよ。

講義はその年の十一月から始まりましたが、行った当時、非常に困つたことが起こつたんです。坂本太郎とか原田亨一はみんな私の学生ですが外に立っている。どうして入らないんですかと聞きました

たら、戸が開いていないんですという。それなら小使いにそういいましょうと小使いに言って、戸を開けてくださいと言いましたら、小使いは私の顔を見ていうのには、今日は平泉先生はお休みですよ。(笑) よわったなと思っただけでも、「小使いさん、わしがその平泉ですが」「おや、そうですか。」

わしは当時まだ幾つですかいな。十二年は二十七ぐらいですね。原田なんていうのはわしより年が上なくらいですわ。中には有名な先生で、数学の沢田先生は六十幾つですから、みんな私より上です。ほかの連中でもそんなに年は違わない。そこで私を学生と一緒に間違えてくれたんです。家へ帰って家内にそう言ったところ、家内が一計を案じて、鬚を生やしなさいという。これはそのときの鬚で、初めて鬚を生やした。いつも学生と間違えられてはあまりにみじめだからね。

○研究室の中に講師の部屋というのは割当てられたんですか。

平泉 それがないんです。大体、国史学科では研究室がないんです。焼ける前には史学研究室はあったが、国史の研究室はない。これがあと重大な問題ですけども、国史学には研究室は要らんとする考えが強かったんです。

○中ですか。

平泉 内部で、しかも教官の間でそれで強かったが、私だけが研究室を必要とするという考えだった。これに最も強硬な反対をされたのは辻先生なんです。史料編纂所というものが挙げて私に反対なんです。史料編纂所が研究室に該当するものであって、そのほかに

研究室は必要でないという議論なんです。ところが私がいうのは、これは本質が違うんだ。史料編纂所というのは大日本史料を編集するところであって、その材料を集め、研究して配列するというのは非常に重大な仕事で、せっかくおやり願いたい。それが国史学の研究に役立つということはいうまでもないが、国史学というのはそれと違う別個のものだ。これの研究法を立てて研究指導をするということとは、目標が違いやり方が違うんだ。別に立てなくてはならないというのが私の考えなんです。

私の考えを喜び、われわれも全力を挙げて応援してやろうといわれたのが西洋史の先生で、いちばん熱心に私を支援してくださったのは箕作先生です。史学雑誌を編集しておったときに、私の編集監督が箕作先生で、あるとき教官控室へ先生と打合せをするために行っておった。ほかにはだれも先生はおられないで、箕作先生だけがいられていろいろ話をしておたら、そこへ東洋史の市村瓊次郎先生が入ってこられた。そうしたところが、その直前に雑誌の編集で、私が変わったことやったんです。だれの論文でしたかいな、覚えていませんが、一冊に一編全部を載せたんです。それはふつうの雑誌としてはすべきことではないが、学術雑誌でちょうどひとつに載れば、かえって便利じゃないかという考えがあって、ズバッと載せたら市村瓊次郎先生はそれをしかられるんです。平泉、ああいう編集の仕方というのはいないぞ。雑誌というものはいろいろなものを載せるから雑誌なんだ。一つ載せて雑誌とはしかられた。

それで私はしかたがないから、おそれ入りましたと言ったんで

すが、箕作先生は承知されない。市村君、何をいうんだ。きみはそういうことをいう職権はないんだ。平泉君に文句があるのならわしに言え。わしが相手になってやる。わしは平泉の監督をしておる。いうべきことはわしがいうんだ。きみはよけいなことをいうな。言たっていいじゃないか。言たら悪いんだ。

それで実に驚いたことに取っ組み合いなんです。そして市村先生のわしの悪口を言いながら、こう回られる。そうすると箕作先生がけしからんと後を追っかけられる。わしはしかたがないから、いまさらどうにもならんでしよう。出て行くわけにもいかず、しょぼんとすわっていましたが、二人がぐるぐる、幾めぐりされたか、回られるんです。(テープ交換)

研究室はできるだけやってもらいたいというので、非常に熱心だったんです。それで私は史学研究室の中にいすだけもらっていたんです。

○その史学研究室というのは、どういう部屋ですか。

平泉 それは正門から入って行って右側に文学部があるでしょう。左側の今の法学部の研究室のほうにあったんです。そこに東洋史、西洋史があったので、それを併せて史学研究室という表題になっていた。

○東洋史、西洋史だけですか。

平泉 ほかがあったが私は関係ないから行かない。

○いやいや、国史は。

平泉 国史はないんです。ないのを私はそこへ入ったんです。一

人だけ入っているんですから本もなし。私がいるだけ。しかし、私はいわば萌芽をそこに置いたんです。私に、史料編纂所に部屋を当ててやるから来いというんですが、行かなかったんです。行けばこの方針は立たないから、一人でおったんです。ばかな話です。人が見たらみんなおろかだというでしょう。

しかし、これで建てるつもりでおったところが震災でみんな焼けてしまいました。そのときにこちらの研究室は残ったし、こちらの史料編纂所は残ってますわいな。本館だけ焼けたんですからね。いよいよ改築するときになって国史研究室とか、東洋史、西洋史、国史とそれぞれ建てようという私の主張が、教授会で認められてそれぞれ建ったでしょう。

そのときにえらかったのは箕作先生ですよ。大日本史料は全部箕作先生がくださったんです。先生がもらっておられたんですが、それを全部やる、持って行けということで西洋史から国史の研究室へもらったんです。

もうひとつえらいのは黒板先生です。先生の家は本がいっぱいでした。それで先生はみんな持っていけとおっしゃる。これまた大胆な方ですね。先生の家からごっそりと何台持ってきたかわからないが、全部持ってきた。

○国史研究室に寄贈ですか。

平泉 寄贈です。

○今でも残っているのかな。

平泉 大分残っているでしょう。散佚したものもあるだろうと思

います。戦争中など散佚していますからね。根幹は箕作先生と黒板先生の本で箕作先生の本は欠巻があります。というのはいくらもをもらったんですから、もらわないものはない。(笑)史料編纂というのには年に何冊か出るでしょう。先生が亡くなってからはもうこないし、何かの都合で先生がもらわれないものはもうそのまま。その欠けているものを史料編纂所から頂戴したいということをお願ひ出たんです。私がそれをいつ願ひ出たか、それに対する返答がどうであったか、これが不思議なことにみんな書いてあるんですが、実に冷酷な答えでしたね。これに応ずるか応じないかは、いま返答しかねる故ひとつ調べてみるということで実に冷淡でしたね。私は、どうぞ願ひしますと言って帰りましたが。

○途中で申し訳ありませんが、先生は学生のころ、あるいは大学院へ入られたころ、どこで……。

平泉 草っ原ですよ。

○草っ原ですか。(笑)建物の中では場所はないわけですか。

平泉 みんな草っ原にいたんですよ。

○今のようない体制が昔からあるのかとはかり思っていました。

○先生が黒板先生とお話しになるのは、どこでなさったんですか。

平泉 それは講義のあとで先生を待ち受けてお話ししたり、史料編纂所にたいいてい席を持っておられるから、そこへ行って話をするということですよ。

○史料編纂所は自分のほうが中心であって、向こうは要らないということですか。

平泉 そうです。東大国史学は史料編纂所が持っているんだという考えです。わたしは外国へ行ったときに、ほかの大事な意味もあるけれども、一つの自分の使命は国史学研究室というものをどういうふうに今後育てていくか、それを私は考えていけばん骨を折ったのはライプツヒで、これは研究室が非常に整っていました。ライプツヒ、ゲッチンゲン、ミュンヘン、ハイデルベルクだけは研究室の図面を全部とって、どういうふうに分列しておるか。ドイツ人は非常に分類が上手ですからね。分類をして、この方面の研究をするならここへ行けということ、そこへ行けばずっとそれが並んでいる。それを全部参考にして大いにやろうという考えで帰ってきたんですが、戦論がきざしていてそれはできなかったんです。しかし、計画、その準備はできておった。

○野原というのは……

平泉 草っ原というのはわれわれには非常に懐かしいんですね。行くとだれか草っ原に腰掛けています。あの時分和服が多かったですからね。下駄の上がたたみで、下にはこういう板の六つか七つ付いたもので、袴のここへインキ壺をさげて、みんなその下駄でカタカタ歩いてくんです。なかでもひどいのは足駄をはいて教室の中へ入ってくるのがある。京都大学の教授になった原隨園氏は私の一年前ですが、西洋史の教室の助手をしていましたが、これなどは下駄をはいてガタンガタンやるので、また原さんがきたなど笑ったものです。

○先生が大学院の学生だったころは、先生ご自身の研究はどこでされたんですか。

平泉 仕事は下宿で、研究は図書館と史料編纂所の閲覧室です。そこでものを見せてもらいました。その時分の図書館というのは、何ともいぬぬありがたさでしたね。非常にいい本があったんです。

○それは焼ける前のことですか。

平泉 焼ける前です。われわれは焼ける前のほうが、自分のものになっていたから懐かしいんです。

○今は助教授以上が教授会に参加しているわけですが、講師にならなくて、大学の行政には全然かかわらないわけですか。

平泉 全然かかわらない。講師には二通りあるんですな。構成分子としての講師と、応援団みたいな講師と二つあるでしょう。私は講座担当ですから構成分子としての講師ですが、何らそういう職権はないんです。助教授になって大分の間は助教授もないんですよ。

○助教授もないんですか。

平泉 全然ないんです。五十年史を書いておるときに、そろそろその要求が出てきたんです。助教授も大事な問題には参与させてもらいたい。

それは妙なことで私は服部先生に叱られたんです。しかられたといっても表面はしかられないんだけど、こういうことが起こったんです。国史、国文はいつも修学旅行をやっておった。これは京都・奈良を見ないではどうしようがない。だから、京都、奈良辺の古社寺を必ず回りました。国史は一年生は関東を回り、二年生のときは関西を回るといのが毎年の慣例で、三年は卒業論文にかかるといふ。

それをやっておったところ、滝精一先生が学部長をしておられたときにある決定が行われたんです。その決定は、今後は修学旅行をするとなれば、それは休暇にのみ行えというんです。

それから私は腹を立ててね。休暇というところがちょっと修学旅行には不適当なときばかりになる。ことに私どもは秋に行ったのですが、秋の休暇となると十二月のほぼ末になるんです。大晦日にお寺やお宮へ行っちゃって、人は相手にしてくれやしない。それでこれに対して私は、非常に悲しいことだ。なぜこういう問題でわれわれに事情をお聞きにならないか。われわれは修学旅行をするときには、その修学旅行のために、例えば十一月にやるとなれば、九月からずっと演習はそれに向けて。それで周密な研究をして、行って実物を見てこうだというので、いろいろ理解して帰ってくる。これは演習のひとつの方式なんです。ところが、休暇にのみやれといわれてもできるものではない。いままでやったことでいったいどこに障りがありますかというんで、文句を言ったんですよ。かなり激しく言った。そして、われわれが悪いことをしておるのなら処罰してもらいたい。私はそれはあえていとわない。黒白を明白にしろって、悪いことをしておるのなら処罰、よいことをしておるのならこれを認めろ、こういう方針でいってほしいというので、滝先生はよわられましてね。

なぜ私がそんなことを言い出したんですかね。黒板先生が洋行中で、ほかに国史学を代弁する教授がいなかったんです。辻先生がおられても国史研究室も反対、修学旅行も反対なんですから、これは

代弁も何もしてくださらない。私が助教授で事を実行していて悪いといわれたのではたまらんというので、私は文句を言ったんですよ。滝先生は非常によわっておられたんですが、そういうことがほかの学科にもいろいろあつて、助教授は人事問題以外にはやはり相談に来るべきだという説になつて、助教授も関与することになつたんです。ただし、人事問題を除くというのは当然ですわね。

○それはあらゆる人事は関係ないということですか。

平泉 関係ないんです。

○昭和四年五月二十二日の教授会から出席していますね。

平泉 そうですか。そのとき初めて出たんです。

○日によって違うんですけども、教授会をやりまして、休憩がまんな中にあるわけです。休憩前に助教授が一緒の場合は休憩後は助教授だけ退場。

平泉 そうそう。総会みたいなものが初めにあつて、大事な問題になると助教授は帰れといわれる

○それ以前のとき、講師、助教授の出席しないころには、大事なことはどういふふうに通達されるんですか。学科中での会議みたいなものはあつたわけです。

平泉 ないです。伝達らしいことはなかったですよ。

○そんなものですかね。(笑)

○この間の教授会でこう決まったからというふうには口頭で。

平泉 そんなことですね。

○直接関係なければ何も知らせないということですか。

平泉 そうそう、直接関係なければ無罪放免ですわ。関係なし。

○その前に教授会に出ている助教授も二、三人いますね。

○それはばくの見た範囲ではわかりません。

○いや、ありましたよ。

○いま先生のおっしゃつたのでは、出席する助教授もあつたということでは。

平泉 それは何か代理で出ていないと困ることがあれば、あるいは引っぱり出されたんでしょうかね。はっきりわかりません。

○その学科に教授がいらないとか。

○昭和四年では教授会記録を見ますと、「学部長及び今回助教授を教授会に列席せしむることに決定せる件に関し、説明並びに挨拶あり。」つまり、この時点から助教授も全員出るようになると思ひます。ただ、これ以後でも教授だけの教授会がたまにあるんです。

○おそらく人事の教授会のときでしょうね。(昼食)

(校訂 昭沼康孝)